



Title	<翻刻>入江昌喜 久保之取蛇尾 後篇 下
Author(s)	
Citation	語文, 18, p. 25-48
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68505">https://hdl.handle.net/11094/68505</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

久保之取蛇尾

後篇

下

# 久保之取蛇尾

## 俚諺雅証目録

からすき	すだく	たしなし
いつかひ	なで切り	うちまき
手足えびのやうな	酒酔本性わすれす	手振り
御内方	よそう	よそう
水の米	酒のかん	酒のかん
手ごろ	ふところ子	そで
いねつむ	小豆粥にて札を押ス	小豆粥にて札を押ス
福引	はねつきかぞぶる	はじき
手まり	はじき	ひゝな遊び
いしなご	なぞく	なぞく 訓義
おつば	おとしだね	おとしだね
節分の格いはしの頭 鶴ヲ喰	ほゝかまち はる	きうくいふて笑ふ
つめたき	みゝずかき鳥の足形	めかけ
いひかはし	せはしい	めかけ
手をおつかき足をくはびら	大こく	ゆかは
手足をえだ	あはひの貝の片おもひ	何ヅク

女をうまそくな	玉むしの恋
さめぐと泣しくくおひく	口あかさぬ
繩にもかゝらぬうつけ	ゑいやく
へつい	千箱の玉
あつかまし	恋ばか
舟のあし	尻ぶる
たぶさ	おきおきをわるを忌ム
ちやうしがしら	ふすべるすねる
所ばつそく	せくなぎ
きうくいふて笑ふ	おきおきをわるを忌ム
おとしだね	ゆかは
ほゝかまち はる	ゆかは
みゝずかき鳥の足形	てゝ
せはしい	ほゝづきふく
大こく	人の情は世にありし時
あはひの貝の片おもひ	づぶりざぶりだふりと

しぶく

かひつぐる

わらすべ とうしみ  
おすへる

どつこも 狂歌

ほゝばる

あさあ ふきはぬ  
さしで

あたゝき 井シャリ

子を捨る藪はあれど

牛に引れて善光寺参

よんべ よざり

譽る詞にようくと云

寸白虫國の守になれる語

井坂迎ヒ

きのふ あす あきひて

あみざい

紐をひばといふ

色めく

こなす

しげあが

露ちりほど 露ほど

# 久保之取蛇尾

何事もふるき代のみぞしたはしき、今やうは無下にいやしたゞいふ言葉もくちをしうこそなりもて行なれといひしも、すでに四百年のむかしへとなれば、いよゝ世くだらゆくまゝにみづかきの久しき代よりいひつきし、いそのかみのふることは今の世のことのはぐさの、其苗をみだすがことくのみなりゆけは、草葉の露の玉／＼に、いにしへのことぐさのこれもあるべど、そはそれとだに、知る事なきぞくちをしきや、そもそも／＼あがくには、ヨリ外國とはことにして、かけまくもかしこきあまつひつきしろしめす事の、まさ木のかつら長くたえすしておましませはこそ、千早振神代のことの葉も、今につたふるはあるなるへし、華夷かはる／＼おさむる国なとはかくあらんやは、さればいやしきすごが口のはにも、いにしへのことの残れるは、いとめてたきためしにこそとおもふに、是をかいあつめんの心つきて、さきにもいさゝか其端をしるし今猶ある言をひろはんとすれと、世のことの葉のさはなる中に、うどんぐゑをもとむるがことし、まことにくだをもて空をうか／＼ひ一つのけしもわたつみを汲んとするにひとしく、水海にしほたるばかりをさなきすさひとぞいへけれど、千さとの道も足もとよりとこそきけ、海河は細きながれをいとはずとぞいふめるいさゝかも今ノ言をもていにしへをおし、いにしへの言を見て今をしへは是いにしへをこのむのはし成へし

○神代紀素戔鳴尊乃以ニ韓鋤劍一斬蛇カラナシノツキタマツカツヲアラとあり、其劍の形チ、今農具の犁カラスキと、いふ物に似たる故の名なるへし、しかば今カラサキの犁てふ物、既に太古にもありて、後劍にも名付し成へし、いと久しき物なり、又今俗物を切て段々とするを、すだくに切るといふも同卷に寸シ斬其タマ蛇ヘキルとあり、又俗物をなで切にするといふも、古語なり、旧本今昔物語卷廿二云、此薯蕷ヲ撫切リニ切ルと云々（頭書、日本紀纂疏曰韓鋤猶言犁也劍形類犁云々）

○今俗物の少ナキを、たしなし、たしない、などいふも、古事記仁德天皇段云、於國中烟不タマ発、國皆貧窮マツシククシナシ云々、又、日本紀にも、仁德天皇六十七年○布徳施惠以振困窮ビケンシクシナシキナシ云々、たしなきの俗語古語なる事知るへし

○女子の詞に、物の大なるを、イカヒといひ、或はイツカヒと云、大系図に紀氏 小足臣、塩手臣、大口臣、大人、此大人を、大人イカウトと訓す、是にてイカヒの義知るへし、イツカヒと、ツを加へていふは、猶つよく云意也、しかとヲしつかと、ひたとヲひつだと、などの例なり、物の数多キをイカヒコトといふも同義、紀大人は天智紀十年御史大夫と見えたる人なり

○女子の詞に、米をうちまきといふは、ことたかはぬに似て誤なり、うちまきとは神なと祭る時の散米をいふなり、なへてのよねを、うちまきとはいふへからず、うつほ物かたり藤原君の卷云、はらハラへすとも、うちまきによねいるへしと云々、うちまきといふが、即米の義ならば、うちまきによねいるへしといふへからず、此文義に知るへし、源氏物語、紫日記、等にいへるも皆散米の事也

○今俗寒氣にふれて、手足の赤くなりたるを、海老のやうなどいふも古語なり、うつほ俊蔭卷に、ちいさき子の、雪を分て、足手はえびのやうにてといへり

○俚諺に酒の醉本性わすれすといふも、同初秋卷に、うへ、御かはらけはしめさせ給ひて、ゑひ人エヒノヒトどもわすれぬ事ありとか仰られてと云々古き諺と見えたり、文人之醉不能スコト藏其辭藻アラバタフ、武毅之人醉則不能コト隱其剛勇アラハタフといへるも本性をわすれぬをいへり

○人の妻を、御内方イヌカウといふも、同様のうへ下シテ二に云、むかしげのゝわう、あるのあそんのないほうは、我をばにいまそかりし云々

○今諸侯の行列に、御馬前イハマサヘなどに、立ならぶ歩侍ハヂメシテを手ふりといふも古語なり、同祭の使の卷に云、おほん馬とも引たて、手ふりどもたちならみたりといへり

○益供に、水の米とて、わせのよねを用る事も、あるきためしなり、初秋の卷に、御ミサカには、わせよねをおほせつかはす

と云々

○器に食物を盛<sup>ル</sup>を、今、俗よそうといふも古語なり、同藏開卷に云、まづこのかゆすゝりてんとて、そへたりつるつきともに、よそひてみなまいる云々

○俗よきほどなる物を、手ごろなといふも古語なり、同卷に云、上達部、みこたちの、みむすめなれど、おやものしたまはす、たゞおとゞにかゝり給侍しかば、今かゝり給へど、手ごろの家なんなければと云々

○酒を<sup>アツムル</sup>緩<sup>ハラシ</sup>を、かんするといふも古語なり、同國譲<sup>下</sup>に云、さけ<sup>サケ</sup>そんにいれてすへて、御かんしてわかしつゝのますといへり

○ふところ子といふも、同卷に云、いでや子ども、廿人にかゝりても侍れど、そこをば、ふところといふばかりに、おふしたてと云々

○俗疏略になるを、そでになるといふも、同樓のうへの巻に云、京わらはへを、<sup>や歟</sup>しほりかり侍りつるに、おやあり、そでになさんと、はゝにて侍るものゝ申しかは云々

○世俗に、正月三ヶ日があひだ言忌<sup>ワタリイ</sup>して、ねるを、いねつむといひ、おきるを、いねあくるといふも、近俗ならず、長明四季物語十一月の段に云、つとめてのとしは、かりそめにたゞいあひとふしも、やんごとなくことふきて、伊勢、賀茂山、野々宮、など思ひやりふかうたどられて、いねておくをも、いねをつむといひ、又ぬるをも、たはらかさぬるといひ、もちひをかゝみといひ、なくを若水あくるといひ、うたるゝを、こゆるといひ、かれいひを、あしはらといひ、其外何なきそぞろけきことくさはやゝあとなき御つほねのうちよりまなひとりてしことなるへし云々

○正月十五日に、小豆の粥を食し、又其粥にて、諸社の札を押す事も、同書云、十五日のつとめては、御づし所の御かゆ奉れる、七くそ<sup>セブソ</sup>の御あつものも、けふまでとゞめおきて、ひとつ御かまにて、とうしなして奉れば、しるしばかり、御いきあきせ給へり、此事推古の御代よりある事にて、あかきは陽の色をかゝせ給ふ御事にて、あづきの御かゆたまはらせ

給ふとぞ、冬の陰の余氣を陽徳にて消させ給ふころなるへし、山の上のおくらといふ人の奉れる歌に、春くれはあかきおものゝあつものもめくみにもれぬ御代にあふらし（頭書、此憶良歌出所可考）とよめるも、あかきおものは、あづきの御かゆなるへし、又松の尾の神人、けふのひるつかた大内にまうでゝ、かんつかさの伯にものして札奉れは、我み山のあふひの根をねこして、其ねごせるを、そくひのうちにいれて、御札をもやはしらに伯してはらせ申せば、又つき／＼のたよりあるべきかたにも、はらせ給ひ、なへて公卿の家／＼にも、此ためしまねぶへし、其そくひは、七くさのあつものゝ残れる、又けふの御かゆをひとつにすりませて、御札をおさるゝあり、定れる例は、御いきふれさせ給へる御ましすべりたるにて、おす事とこそ、是もはら、いかづちいなづまのたゞりをやらはせ給んとの、松の尾の御ちかひおはしますとの御事なるへし云々

○又十六日は、やぶりといひ、或は節と称し、親戚宴会して、子女福引といふ戯をなす、今按に、類聚国史卷、七十二云聖武皇帝、天平三年正月辛丑正月朔丙戌ナリ  
辛丑ハ即十六日ナリ天皇御シヅ大安殿ニ宴ス五位以上ニ晚頭移シテ幸皇后宮ノ○以賜シテ酒食ヲ因令レ採ヒヨウリ短籍ノ書ル以ス仁義礼智信五字ヲ隨テ其字ヲ而賜フレ物得ル仁者純也、義者糸也、礼者綿也、智者布也、信者段常布也、云々短籍ヲとるとは、今所謂クシ籠ドリ敷シ、固如此形をいふにや、是今俗のいふ福引に似たり、又讚岐典侍日記云、扇引、こよひはさはと仰られしかは、あけんが心もとさに、こよひともふに、人たちのけしきの、くらくて見えざらんこそ、口をしうさむらへと申しがは、つとめて明るやおそきとはしめさせ給て、人たち召す多て、大式三位殿、しづめてああはれたりしに、先ひけと仰られしかば、ひきしに、うつくしと見しを、えひきあてゞ、中にわろかりしを引あてたりしを、うへになげ置しかばかゝるやうやあるとてわらはせ笑ふ云々、此時已に、扇引といへり、是等の事をまねひつたへて、今の福引の遊びはあるなるべし○今民間兒女の戯遊、正月にはねをつきかぞぶるに

ヒト。フタ。ミ。ヨ。イツ。ムウ。ナ。ヤ。コ。ノ。トヲといふ是も古語の残れるなるへし按に鎮魂祭神樂歌、次二

ヒト・フタ・ア<sub>古語三ヲア</sub>・イツ・ムユウトユ<sub>所謂ムニ日</sub>・ヤ・コ・ノ・ロ峰西川行幸和歌序ナ・タリヤクリハ十ノ古語ニテ足ル之ヲハタリノ転したる歟。

十度<sub>ヲ</sub>讀レ之毎度中臣玉結也云々此古語の遺称なるへし、鎮魂祭之事、旧事紀天神本紀天孫本紀、等をかうかへあはせてしるへし

○手まりといふ物も、いにしへより醜ものと見えたり、四十二物詩歌に貝覆と、手鞠と、いづゝぎ 皇宮大夫

「黒髪のみたれてさはくまりよりも貝におほへる袖はなつかし

又増鏡うち野の雪の巻に云、撰政殿さへわからむし給へは、よるひるさむらひ給ひて、女房の中にましりつゝ、らんこ、貝おほひ、手まり、へんつぎ、などやうの事どもを思ひくにしつゝ日をくらし給ふと云々

○小石にて、はじきといふ遊びをするも、今俗ならず、いと古代より伝へし戯なり、うつほ物語祭の使の巻に云、中のおとゞに、かうしんし給ひて、をとこ女かたわけて、石はじきし給ふといへり、和名鈔雜芸類云、彈碁<sub>一名</sub>始自魏宮、云々是敷同書に施<sub>ハイ</sub>波之岐<sub>ノ</sub>是は征戰之具也石彈<sub>イシバン</sub>の名是にならぶ成へし

○又いしなごの遊びも久し、拾遺集に云、東宮いしなどりのいしめしけれは、三十一をつゝみて、ひとつに一ト文字を書付てまゐらせける云々又栄花物語に、御前にめしいでゝ、碁双六うたせ、へんつがせいしなどりせさせて御覽すと云々、赤染集に女院の姫君ときこへさせし頃、いしなどりの石めすをまゐらすとてとあり、散木集に、伊勢齋宮に侍る頃、いしなどりの石合せといふ事を、せさせ給ける後、ちいさきさうしのいしなどりの石のおほきさなるを作りて、十の石に一ト

、書付侍りける十首の中

君かためゆた野をわけてひろひつる千引の石にたれかあふへき

○難遊ひ事尤久し、崇神紀に武埴安彦<sub>ヲ</sub>が謀及を告る歌に、比売那素霧須望といへるを、祝紀云、為<sub>ニ</sub>兒女之遊<sub>ニ</sub>今案比<sub>ニ</sub>比奈<sub>ヲ</sub>也云々此説いかゝ野客叢書卷七曰沈約宋志謂、旧記郭虞有三女、於三月三日俱亡、故俗忌<sub>ヲ</sub>此日<sub>ヲ</sub>皆於東流水上<sub>ヲ</sub>祈攘祓潔<sub>ス</sub>云々恐クハ難祭此郭虞が事による歟、今兒女紙人を制し醜も、もと贋の義にて祓の具なり、加茂保憲女集に

「大ぬさにかきなでなかすあまかつはいくその人のふちをしるらん  
此あまかつといへるは、今道子離といふ物のたくひなり、加茂保憲は清明か師にて、天文陰陽の祖也、其人の女としてかくよめるにしてしるへし、又和泉式部

あまかつにつくともつきしうき事はしなとの風そふきもはらほん

其外三月上巳のはらひの事はうつほ物たり菊の宴の巻に云、かくてやよひの十のよ日ばかりに、はじめての巳の日いできたれば、大将どのは、上巳のはらへしに難波へ、かたぐをとこきんたちものこりずなくおはします云々源氏須磨巻にも、巳の日のはらひの事見えたり、本朝もいにしへは巳の日を用ひしがのちく三日を用るも、もうこしの例にならぶ成へし、今祓の義なく、酒飯をまうけ宴会をこととするは、俗曲水の宴に混合するなるへし 曲水宴ハ顯宗 帝元年始 又離を九月に観も漢人祓除亦有アリ在秋間者とも見えたれは共に祓の義なるへし離遊びの事あるく物に見えたるは、うつほ物語巻のうへの巻に云、ひいなあそひなど、もろともにして見せ奉り給ふとあり、又斎宮女御集に、うちにおはせし時ひよな遊びにと云々、蜻蛉日記に、かとりのひよなきぬ三ツ縫たりとあり、中務集にもひよなあそひにと見えたり、御堂関白集に、たかまつの君の御もとより、ひな屋まるらせ給ふとも、又若宮のひいな屋、さまくの物うゑなとして云々、源氏、枕草子に見えたるはさらなり、又此離の仮名、うつほ物たり、源氏、枕草紙などにはひいなと書、斎宮女御御集、蜻蛉日記、中務集等には、ひひなと書たり、いづれか是なるをしらず、まして正字は无所見、契沖師いはく鳥のひなといふ時、ひよなといへる事見及ねど、ひよと聞へて鳴ものなれば、ひよなきを略して、ひよなといひて、それを猶略してひなといふにや云々、

今案にうつほ物語藤原君巻に春を出てねぐらもしらぬひな鳥もなそや暮行ひよと鳴らんとよめり  
契又いはく、鳥のひなは、ちいそいたひけしたれは、装束の形などを、ひながたといひ、是を思へばひよなも、屋形人形より、よろづちいさういつくしきを、離にたとへて名付たるにこそと云々、契沖はひよなの仮名を同心せられし歟、今案に积日本紀に比比奈と書るも拠あるにやあらん

雑遊の異説、寺島氏云、或書云、敏達天皇二年春正月、侍従奉勅雑像、太子親取雑像、分其男像女像、下略

大成經第三十五

下略

今案に、此或書といはれしは聖皇本紀の説にて、信用にたらざる物なれば今悉こゝに載せず

多田氏云神功皇后三韓ヲ平伏シ玉ヒ筑前国宇瀬郡蚊田ニ漂着シ玉ヒ此所ニテ普田天皇ヲ御誕生マシマシ、夫ヨリ御帰京アラントテ、難波津ニ御船向フトイヘトモ、事アリテ御着岸ナリカタク武内カ母方ノ本国ナレハ紀州名草郡粟島着船シ玉フ  
今案に、紀氏系図に武宿禰者紀伊國名草郡宇治郷人母山下陰女云々しかれは其由緒はさる事なれとも皇后の御船紀州名草郡に着給ふ事日本紀古事記旧事紀等に見えず何に拠て書れしにやもし粟島雑、付会之説をまうけんための杜撰にやいふかし、日本紀云命ニ武内宿樓チ皇子一横出ニ南海泊ニ于紀伊水門ニ皇后之船直指ニ難波于時皇后之船廻ニ海中ニ以不<sup>コト</sup>能進云々其後広田生田住吉等の神を祭り給て則平得度海皇后詣ニ紀伊国ニ会ニ太子於日高ニ云々名草郡と日高郡は南北之違なるべし

然ル處御產日久シク、御船中ニマシマセバ、シキリニ御帶疾発テ、医神少彦名命ニ是ヲ祈リ玉フ、御身バカリニテモナク、御子普田天皇ノ御為ニモト、御撫物ヲ作テ、御形代トシ、海流シ御安全ヲ願ヒ玉フニ、玉舎安全、皇后モ御帶下平愈マシケリ、此故ニ御產第前ノ蚊田ノ地名ニヨセテ、此所ヲモ加田ト云、今ノ世蚊田粟島ト云ハ是ナリ、サレバ此時御母子ノ御形代、鄙ノ旅ニ瘦玉フ御形ユエニ、雑ノ字ヲ書テモヒイナト云ヒナノ義也

今案に形代は和名祭祀具偶人ヒトカタ即神功紀薦靈をクサヒトカタと訓しいにしへ形代をヒトカタといひし事明らか也鄙の旅にやせ給ふ御形なればヒナといふとは迂遠なる名目義も又通せずしてうけかたし雑ノ字を書てもヒイナ云ヒナノ義也とは猶以其義通せず

サレバ、粟島ノ社ニヒナヲ捧テ女人ノ病ヲ祈ル事、此時ヨリノ起原ナリ、堵コソヒナハ夫婦ニアラス、御母子ノ御形ナリ、  
ツ身着タル童舎ハ八幡宮ニシテ、前張キタル大君舎ハ神功皇后ニテゾマシマス云々 下略

○雑遊びの具に、飯盛小器を、おつほと云も、うつほ物かたり國譲卷云、宮たちの御まへに、沈のをしきして、るりの御つ

ほにてものまわり給ふ云々 契沖いはく、御つほとは、稚子の物ぐふごきの名也といへり、今云おつほの名しるへし  
○なぞ／＼の遊びも久し、拾遺集に、なぞ／＼ものかたりしける所に「我ことはえもいはしろの結ひ松干とせをふともた  
れかとくへきとあり、玉篇謎、米閉切隱言也とあり、和訓の意は、なんぞ／＼と問かけて、其意をあかす故、なぞ／＼とい  
ふとそ、なんぞをなぞといふは、古今集に、なぞ世の中の玉たすきなりとも、なぞわかこひのかひよとぞなくともよめる  
がことし

○節分の夜門戸に觸のかしら松をさしはさむ事、土佐日記に、けふは都のみぞおもひやらるゝ、こへのかどのしりくめな  
はなよしのかしら云々 しかれはいにしへは、鱗のかしらを用しと見えたり、又杠谷樹の事、今案に和名鈔石楠草和名トヒ  
俗云サ 云々、東雅云、石楠草はいにしへ除夜、民家の扉ドアに此木をさせば疫氣を除ふといへりと云々、しかれは此木を和  
名トヒラノキといへるも、扉にさしはさむ故成へし石楠草は、今俗にサクナケといふ物なり、今も大峰にまうづる者これ  
をとり帰りて門戸にかけ置て、疫氣をはらふといへり、いにしへの遺意なるつし、されはナヨシを誤りてイワシとしトビ  
ラノキを誤て、ヒ、ラギを用る事になれるにやあらん、トヒラノキ古く歌にもよめり、範兼童蒙抄云山寺ノ南面テニ、石  
楠草ノアリケルヲ、客人ニ是ハ知リ玉ヘルヤト問ケレバ、トビラノキトナン申トイヒケレハ、坊主ノヨメル  
ウエタテ、アケクレミレトシラサリキトヒラノキトハケフソキ、ツル

類聚抄にありと云々、さて觸ひゝら木を用る事も又既に久し、長明四季物語云、いわしのはさみもの、ひらきのほこは、  
なやらふ家には、百敷ならてもある事なれども、大内にはかにもりのつかさ、例としてつかうまつれり、此なやらふ事は、  
もろこしにも侍れど、わきて我國には、神だけのすべらきの六と世の春より、ものし給ふ御事にて、いみしき御ためしな  
り、ひゝら木は、我神の社の、あるはみぞろの池のあたりより奉る事、定れる故実となれり云々、又節分に鸕鳥ヅクシを喰事も、  
同書に云、ついたるの夜は、をけらのもちひ五条天神勝餅 ノコトナルヘシ つぐみの鳥など焼て奉り、御かれいひのまはりに奉れば、是  
もののゝけ、えやみ、をやらびぬへき本文侍るとなん

○俗に声を、こはいろ、こはづくる、こは高なといふも古語也竹取物語に云、かくや姫いはく、こはだかにな給ひそと云々 旧本忠峰集に「山さとの秋こはたかになくものはつまとはせる鹿にそありけると、よめり遊仙窟ヨウセンカ大語と書り宇治拾遺第二清徳聖千手だらにを、こはだえもせざ誦し奉りといへり、又こは高なるを、わゝしきといふも、増鏡浦千鳥の巻に

云、行幸の当日に、左大将内経、花山院右大将定行、列をあらそひて、隨身どもわゝしくのゝしれはと云々

○冷をつめたきといふも、俗に似て俗ならず、玉葉集に

「雲をいてゝ、我にともなふ冬の月風や身にしむ雪やつめたき

とよめり、弁内侍日記に、南殿のかたざまにて、遊びしに、左衛門の東のかたに、霜のしろくさえたりし、さむくつめたさかぎりなかりしも面白と云々 又云、次の日くれほどに、かれより、うはがきにはあしつめたの御かたへとかゝれたると云々

○今あき人などのもあつかふ、うちがひといふ物は、もと鷹野に出る犬飼などのもたる助銅袋ウチカヒといふ物にもとづけるなり、今打違など書は誤なるへし、定家卿應三百六十首に

「物数をしつるしに犬やりのうちかひ袋うちかひもなし

犬の鳥を追出して、かみたつれは、飯にこぬかをませて、一づゝ銅ふを、うちがひといふ也、それを入るゝ物故、うちかひ袋といふなり、今は金銀錢などを入もありく物とす、されどゐなかうどは、こりめしなどに入るゝ事有、却而古意を存に似たり

○或人問云、男女の中に、おもひかはし、いひかはし、などいふ詞此かはしは、かよはしの中略にて、通の字歟、即曰さもあるへし、但し、今いひかはしといふ、語意を思ふに、通はしにては、すこしかろくやあらん、和名鈔に肥後国、合志カハセ此義なるへし。

○今俗人を頼むに、手すつて頼むといふも古語なり、竹取物かたりに云、竹とりをよひ出して、むすめを我にたべと、ふ

しをかみ手をすりの給へは云々

○俚俗、手の大なるを、熾斗<sup>アキカキ</sup>のやうなるといひ、足の大なるをくはびらといふも古俗なり新猿樂記云、手如<sup>ハク</sup>鐵鉗<sup>カナカキ</sup>足如<sup>ハシ</sup>鉄鉗<sup>カナカキ</sup>といへり、和名鈔附アナと有<sup>アナヒラ</sup>とノ通ス枚ハ平ナリ鉢ハ和名出<sup>農具</sup>又太秦牛祭祭文云、松楓頭仁木

冠乎戴支久波比良足仁旧<sup>ルナ</sup>高乎絡付云々尤古キ諺なり、世伝云、牛祭祭文ハ、伝教大師作といへり、新猿樂記ハ學士藤明

衡作云々

○鄙俗の語に、手足をエタといふも古語也、水鏡武烈天皇の段に、四ツのえだを木の枝にはり付てとあり、其外古<sup>キ</sup>ふみともにいくらも見えたり、和名鈔肢體和名<sup>カラギ</sup>衣太<sup>カタ</sup>契沖師<sup>シキウシ</sup>云与<sup>ミ</sup>枝條<sup>ハシヅケ</sup>同訓四肢之於<sup>ケル</sup>身猶如<sup>シテ</sup>木之有<sup>ハシヅケ</sup>枝條<sup>ハシヅケ</sup>云々

○俚諺に、よく肥たる女などを見て、うまそなといふ、万葉集作者に、少令史田氏肥人<sup>カツビ</sup>といふあり、是等の訓よりおこる歟

○兒女の談に、もろくの虫、玉虫を恋ふ、玉虫いはく、ともし火をもりて来らんものに逢ふと、故にもろくの虫火をとらんとして死すと云々此事近俗ならず、古今集第十一夏むしの身をいたつらになす事もひとつおもひによりてなりけり教長卿此歌の註云、世俗に玉むしの火をとりて来らん虫にあはんといへは、とりにくとて、火に入て身をほろほすなりといへり、たしかの事ならぬど、此歌は其心と聞えたりと云々、いとふるくもいひ伝へし事とするべし伊勢集に

夏虫のしるくまとふ思ひをはこかぬかなしと誰か見すらん

○世俗に、いたく泣を、さめくとなくといふは、雨のふることく泣といふなり、雨々と書へし、古今集春下大伴黒王、春雨のふるはなみたかとよめり、又しくく泣といふも、近俗ならず、右京大夫集に云、はかなりし人の、水のあはとなりし日なれば、れいの心ひとつに、とかくおもひいとなむにも、我ながらんのち、たれかこれほともおもひやらん、かくおもひし事とて、思ひいづへき人もなきがたえがたくかなしくて、しくくと泣より外のことそなき云々、又おひくといふて泣といふも、讃岐典侍日記に、堀川院かくれ給し所に云、たゞおはしますらん所へ、我を召せや、おひくとく

どきたてゝ泣るゝ音すと云々、又海士の刈藻物語に云、ひきあけて見給へは、からだもなく、紫雲にうつり給ひぬ、ひしりかなしくておう／＼と泣給ふと云々

○利口なるを、人に口明さぬといふも俗ならず、源氏はゝ木の巻に云、ざえのきは、なま／＼のはかせはつかしく、すへてくちあかすべくなん侍らざりしと云々

○諺に、いたくよはりたるを、繩にもかづらにもかゝらぬといふ、頤宗紀云、氣力衰邁イキナカライロヘスキ、老髦虛羸オホレクシタメダリカ・レモバケナハ、要抜扶纏ヨウハツフラン、不<sub>レ</sub>能ハナヘ進歩ムツイ、うつけ者などいふもこゝに知られたり、神功紀無実ノツツとも書り

○俗、人群集する時、エイヤ／＼と云、今案に、内宮六月十五日荒蠣御贊アラカキミニニヤ神事歌云君乃御倉之山爾塙乃満如富古曾入座ミヅルコトナヒ、惠伊耶、惠伊耶、是等の古語の遺れるなるへし

○籠を、へついといふも古語なり、神樂歌に

止与倍津以ヨシヨシ、美遊比須良志久堅乃アシビスラシヒタカタと云々

○千秋万歳千箱玉といふは宣化紀白玉千箱といふ語あり

○俗に、事繁キサキをあつかましきといふ、散木集に

「世の中のあつかはしさをあせかけは黄なる泉に思ひけぬへし

とあり、マとハと通韻、是今いふあつかまし歟又別意有歟

○範兼董蒙抄云、白毫式、云天竺スカイに術婆迦と云童子あり、其母年頃后につかふまりけり、此童おもはすに后を見奉りけるより、いかてと思ふ心つきて、人しれずいもねす瘦ゆきけり、母あやしみてとへど、いはずして物おもへる氣色あらはなり、母のいはく、何によりてか我にかくすべきとせめければ、ありのまゝにこたへけり、母思ひめくらしていはく、江のほとりにて、毎日いをゝ釣れ、我取次て后に奉らんとをしゆ、是によりて毎日毎に鯉を釣てきたれば、母これを后に奉る事三とせになりぬ、后志のふかき事をあはれひて、よきひまにとひ給ふ、いかなる事を思ひてするわざぞと、母おそれ

ながら、此董のおもへる事をもらし申、天竺のならひ、心に思ひ言葉にいひ出る事を、たがへざりければ、あふへきよしを契り給つ、后たよりをえん事かたければ、はかりことをなしてのたまはく、術婆迦先自在天神にまゐり、其宝殿のうちにかくれをき、参りて逢んと契りて、みゆきして自在天神の宝殿に御輿をよせて、一夜すこし給ふ、人しつまり夜更て后術婆迦かる所に行給ふに、ね入てしらす、其しるしに玉のかんさし一すぢを置いて、輿のもとへ帰り給ぬ、又行給へるにおとろかす其しるしに又かんさし一すぢを置いて帰り給ぬ、こゝに母、術婆迦にとふに、寐入ておほえず、たゞ此玉簪はかり有とこたふ、母、今は力およふへからずといふを聞いて、術婆迦胸より火出きて、もえてけむりになりてうせぬと云々、彼鯉を釣て、ことを、通せしより、こひとはいふなり、もうくの恋のおこり、此術婆迦よりはしまれり云々、又恋にもゆるおもひ、恋のけありなといふも、此事によれり六帖に

こひく（こと）てひとひく（こと）に恋しなはもえん烟はこひの香やせん

此術婆迦が事、康頬宝物集にも見えたり、又俚語にバカと云言葉も、此術婆迦がことよりおこると、仙源抄に見ゆ一諫東雅云癡をバカといひ、無智をバカラシなど云は、梵語と声音通す、梵に慕何を翻して、癡といひ、摩訶羅翻して、無智といふと云々

### ○万葉集第七

しまつたふ足はや（の）ふ船風（の）まもりとしはやへなんあふとはなしに

童蒙抄に此歌を注して、舟の腹をあしといふといへり、今船に物積たる多少によりて、船の足が入る入らぬと云詞近俗ならす

○今俗に、女のなまめきありくを、尻ぶつてあるくといふも、万葉集第十八に

へさと人の見るめはつかしさあるにさとはす君かみやてしりぶり

佐夫流子は遊女の名なり、仙覺抄云、さとはすとははやくとふ也、しりぶりとは、あるくとて尻をぶるなり云々

○俗髪モヘリをタブサといふも、景行紀頭髪タブサと見え、崇峻紀作四天王像タブサ置頂髪タブサとも見えたり

○今俗、炭火をオキといふ、日本紀私記炭火オキビと訓ス古語なる事知るへし、和名鈔云塘煙ミエヌモカラ和名於熱灰新火也云々新撰萬葉に人緒念ヒヨウ心之熾者身緒曾燒烟立砥者不見沼物幹、小町は、おきのゐて身をやくよりもかなしきはともよめり又炭火を割ばわろしといふ俚諺も古く見えたり信明集にへ手つさひに火桶のおきやわりにけん恋しき人にあはぬころかなとよめりオキビはオコリビの約コリの反キオキハオキヒノ下略

○灯花をば丁子頭といふも近俗の語にあらず今物語に作信実朝臣待賢門院の堀川、上西門院の兵衛おとゝひなりけり夜ふかくなるまでさうしを見けるにともし火尽たりけるにあふらわたをさしたりければ世にかうはしく匂ひけるを堀川ともし火はたきものにこそ似たりけれ

といひたりければ兵衛とりあへす

ちやうしかしらの香やにはふらん

と付たりけるいとをかしかりけりとあり又此丁子頭といふもの出来れば外よりよき物くるゝといふ俚諺も西京雜記卷三云樊將軍会問テ陸賈リ曰——賈應ヒ之曰目瞬マジロクベ得酒食燈火華得マナハ錢財マナハ云々是なり

○女なとのうらむる事あるをそれともいはずすねて居る人をふすべるといふも古語なり蜻蛉日記にへもしほやくけぶりの空にたちぬるはふすへやしつるくゆるおもひに、などとなくさかしらするまでふすべかはして此頃はいとゞ久しう見えずと云々枕草紙にくるしげなる物おもふ人ふたりもちてこなたかなたにうらみふすべられたるをとこと云々元真集に久しうこづとあすべて出ぬ人と云々是等見つへし又すねるといふは、古語にくねるといひし転語なるへし、クとスと同韻通す源氏紅葉賀にまつくねくしうらむる人の心やふらしと思ひてと云々紅梅に云うるはしうもあらぬ心はへうちましり、なまくねくしきことも出くるときへあれど、云々是等今俗すねくしといふ意と聞ゆ

○所ボツソクといふは、南朝の准后親房公、東奥を治給ふ時、地下の由緒を捨す用ひて、国人の筋目を正し、座を定椀飯

の儀式をたつる、是を所法則トコロホソゾクと云

○俗に溝をセ、ナギと云も、顧昭陳状に、かひやがしたの事を論する詞に云、かひやがしたとは其屋の下歟、それも蛙鳴ニシ。二年子ノよせ、ニヨヌミナ、ウツブニシ、もあれば圭すみて鳥事一定なりと云々

でんやと尋ねしかば、其下にはみをせうたきだよおれ興へる。甲子一月  
○俗、笑ひいりたるをキウ／＼いふて笑ふと云、狹衣に、そゝはしるなればきぬのすそをひきとむるにや、たぶれぬ、  
きう／＼とせめき笑ひいりつゝといへり

○俗に、妾をめかけと云、同書に、さやうのはそきんだちのかけめにておはせんよりは、たゞこゝろみ給へおとゞの御ちいはひにてこそおはせめと云々、いにしへかけめといひしを、誤りて今めかけといふなるへしてかけは、めかけの転語なり、かけめとは陰女の義歎萬葉に隠婦コモリツバとよめり

○婧蛉日記にそんわうのひがみたりしみこのおとしたねなりと云々 おとしだねおとし子など今俗にもいひ伝へたり  
○世俗に、何ヅク彼ヅク錢ツク金ヅク、なといふ詞も尤太古の詞と見えたり、古事記応神天皇段云汝有<sup>アラハ</sup>得<sup>ハルコト</sup>此娘子者避<sup>ヘサク</sup>  
上下衣服<sup>ノコロモゼ</sup>一量<sup>ノクケス</sup>身高<sup>一ト</sup>而醸<sup>ニ</sup>甕酒<sup>カモシモタビノ</sup>亦山河之物悉備設為<sup>ニ</sup>宇札豆玖<sup>クニニトヅレヅクタ</sup>云爾云々 遊仙窟云且取<sup>ニ</sup>双六局<sup>ハント</sup>來共<sup>ニ</sup>少府公<sup>トウタムサカク</sup>賭<sup>テ</sup>酒僕答曰下<sup>ク</sup>官不能<sup>ハ</sup>賭<sup>ハ</sup>酒共<sup>ニ</sup>娘子<sup>一</sup>賭<sup>レ</sup>宿<sup>云々</sup>

○鄙俗の語に頗ホを、ほゝかまちといひ又打擲アマツを、ハルといふ、たとへはホ、カマチハルなどいへるも、いにしへよりの俗語と見えたり今物語に云伏見中納言といひける人のもとへ西行法師行てたつねけるにあるしはありきたがひたる程にさむらひの出て、何事いふ法師そといふに、ゑんにしりかけてゐたるを、けしかる法師の、かくしがましきよとおもひたるけしきにて侍ともにらみおはせたるに、みすのうちにさうのことにて、秋風樂をひきすましたるをきゝて西行此さむらひにもの申さんといひければ、にくしとはおもひながら立よりて何事ぞといふに、みすのうちへ申させ給へとて

ことに身にしむ秋の風かな  
といひたりければにくき法師のいひことかなとてかまちをはりてけり後に中納言帰りたるに、かゝるしれものこそ候つれ

はりふせ候ぬと、かしこがほにかたりければ、西行にこそありつらめ、ふしぎの事なりとて、心うがられけり、此さむらひをばやがておい出しけり云々和名鈔云、顙<sup>カク</sup>波知<sup>カク</sup>又云顙<sup>カク</sup>頬骨也或云輔車<sup>ツバカラ</sup>云々海士の刈藻物かたりに、あまりにはしらのたちければにや、侍従をひきがなぐりうちはりなどしてといへり

○俗浴<sup>ユア</sup>するを、ゆかはといふも古語也、尤恭紀に沐浴<sup>スカハアミ</sup>

○物書たるがつたなきを、みみずのやうにといふも、信明集に云かへりことに、みづ書をしておこせたればわひしきに恋にまとへる心にはそのことゝしもみえすそ有ける

是も手のわろきをいへり、鷗の跡の土に残りたるやうに、その事とも見えかたきとなるへし、又鳥の足がたのやうにといふも、松蔭中納言物語山の井巻に云かぎりにこそ侍れ、我ゆゑに御つみのふかくわたらせ給はんこそ心にかゝれと、鳥の足がたのやうにいとはかなく書たりと云々

○手をテ、といふも神楽歌に大宮乃知以左小舎人手々仁也手々仁也玉奈良婆手々仁也と云々袋草紙にてゑひあしあひにけりともよめり

○日本紀私記<sup>神武</sup>大急<sup>之波</sup>世志<sup>と</sup>訓す今俗セハシ、といふ詞は歟シとセ通<sup>ハ</sup>

○児女の酸漿<sup>ホンキ</sup>をふく遊びも、いにしへよりの事なるへし栄花物語に云御いろしろううるはしく、ほづきなとを吹ふくらめて、すゑたらんやうにぞ見えさせ給ふといへり

○僧の隠女ある、其女を、大こくと云は一書云唐熊番遇難記有<sup>ニ</sup>僧妻<sup>ヲ</sup>者謂<sup>ニ</sup>火宅僧<sup>ヲ</sup>といへり、是等を仮名書の物に見誤りて火たくの火ヲ大<sup>ヲ</sup>よみたく<sup>ヲ</sup>こく<sup>ヲ</sup>誤り、大こくといひ伝へしにやといへり  
○諺に人のなさけは世にありし時といふは菅公御百首

「あはれわかうき時つるゝとももかな人の情は世にありしはと

○又あはひの貝のかたおもひといふは萬葉集第十一

伊勢の海士の朝な夕なにかつてふあはひの貝のかたおもひにして

とよめり此歌より出し諺なるへし

○俗、水へ物の落る音をヅブリといひ又ザブリなどいふも、近俗ならず大和物語をとめ塚の段に、此ひらばり、川にのぞみてしたりければ、つぶりとおちいりぬといへり、又宇治拾遺第三に此わたし船に、廿余人の渡る者づぶりとなげかへしぬと云々又第十一に西に向て、川にざぶりと入と云々又物のだぶど落るなどいふは、塔落と書へし、字彙塔託甲切、物墮声とあり

○心にすゝますしてなすわさを、しぶくにするといふも近俗ならずおちくほ物語に云御文とて給へばしぶくにとりてといへり、又宇治拾遺第五に、童しぶくに法師になりけりとも見えたり

○小兒などの泣べきおもよちするを、かひをつくるといふも同巻に彼童の法師になりたるをるいふとて云、つゆむかしにかはらす、僧正うち見て、かひをつくられけりといへり

○薬藉フランクを、すべといへば左言カタゴトにやと思へばさにはあらさるへし、同巻第七にあるにもあらす、手ににきられたる物を見れば、わらすべといふ物たゞ一筋握られたりと書り又燈心を、とうしみといふも栄花物語こまくらへの巻になぬかゞうちにやかてまんどうゑさせ給ふへければあぶらとうしみまでもてのはらせ給ふと書たりとうしんといふは却而あしゝ和名鈔。燈心和名度字之美とあり又教るをおすべるといふも浜松中納言物語第一に云ふけうのつみいとおそろしとおすへさせ給ふと云々

○何方ツバタもといふへきをドッコモといふも此頃の俚諺にはあらす幽斎翁九州道記 宗易

へあまさかるひなの住ると思ふなよとつこもおなし浮世ならすや

返し

へあまさかるひなには猶そゐたむなきとつこもおなし浮世なれとも

幽斎

ふたむなきは今俗のいふるとむなき也是は今所謂狂歌の躰なるへし、しかれとも、今の世のことからにはかはりて、一首の意俗ならず、今狂歌を好む人に、狂歌といはずしてひなぶりなど称する人あり是は狂歌の字を嫌へるにや、又名目の抛なしと思へる歟、ひなぶりとは神代紀下照姫の歌を夷曲といへるをおもへる歟、しかれとも、古今の序に久かたのあめにしては、此歌にはしまるよし、和歌の始とも貫之ぬしの書れしを、いかて私に狂歌の事とすへき狂歌といふ名目いにしへに拠なきにあらす、喜撰式云、病苦雖レ不レ去又有何過、然而詠誦声不順由也誠是狂歌云々又明月記建保三年八月廿一日参内——按察可レ参之由女房申レ之忽押<sup>アサヒ</sup>連歌<sup>ヲ</sup>被レ待<sup>ハシマツル</sup>彼参<sup>ヲ</sup>之間有<sup>ニ</sup>狂歌合<sup>ハシマツル</sup>云々略文、しかれば是等を名目の拠にてたゞいひならはせるまゝに狂歌とぞいはまし

○人の口に物をふくみたるをホ、バルと云も古語の転なり、万葉集第二十に「このてかしはのほゝまれどゝよめり、マとハ通シレ」とル通<sup>ス</sup>ホ、バルと同語、是はこのてかしはの芽の開へき程になりたるが人の口に物をふくみたるかたちに似たればしかよめり人にツボロ<sup>チ</sup>といひ花にツボミといふ花の咲開<sup>フラグ</sup>も人の口をひらき、又ゑむに比していへり

○俗に、物の相應せるをふきふといひ又ふさはぬといふも古語なり、古事記上、日子<sup>ヒコ</sup>連<sup>ツナハシ</sup>神歌<sup>コロハシ</sup>許<sup>サハシ</sup>札<sup>サハシ</sup>婆<sup>ハシ</sup>布<sup>サハシ</sup>佐<sup>サハシ</sup>波受<sup>ハズ</sup>とあり又万葉集第十八へあづまをさしてふきへしにと云々

○枕草紙に、過にしかたこひしき物、ふたあるえびそめなどのさいでと云々後撰集下詞書に紅葉と色こきさいでをと云々  
栄花物語鳥辺野の巻に、さまゝの色のきらめきたるさいでなとをつくりたるやうにと云々袖中抄にも其さいでをとりでといへり此さいてとは絹切<sup>クモリ</sup>をいふしかるを、今俗鍛冶の家に、つぎ切<sup>クモリ</sup>をさいでといふ是等はきはめていやしきものゝ口に雅語の残りて、おもひもよらぬ所にて聞侍しがをかしきなり

○今俗餅をアタタキといふ古語也新猿樂記に温餅<sup>アタタキ</sup>と見えたり又鄙俗の詞に米をシヤリといふは古語を伝へ誤なり同書に麦をシヤリと訓す

○諺に牛に引れて善光寺参りといふは一書に云善光寺旧記云むかし此国に齡七十に余る姥ありけり後世に志す事をもしら

で年月をくらしけるある時織上アシテたる布をさらすとて川辺に出来るに大なる牛はなれ来りけるが彼布を角にかけて走れば姥大に驚跡を迫るて行ければ当寺の内へ入けり姥こゝに到りて始て此御寺を見てこはいかに我此年におよふまでかゝるいかめしき御寺のありけるをしらさりけるよとおもひて僧徒にあひて事のやうを尋れば有かたき事かきりなし姥それより後世にもとづきけると云々世のことわざに牛に引れて善光寺参りとかいふめるといへり今案ニ今昔物語震旦部第七云今昔震旦ノ予州ニ一人ノ老母アリ若キヨリ邪見深シテ神道ニ仕ヘテ三宝ヲ信ゼス世ノ人ゴゾツテ此ヲ神母ト云フ三宝ヲ嫌カ故ニ寺塔ノ辺ニ不近付<sub>レ</sub>若道ヲ行ノ時僧ニ值ヌレバ目ヲ塞テ過ヌ而ル間一ノ黃牛有テ神母ガ門ノ外ニ立リ三日経ルニ更ニ牛主ト云者ナシ然レハ神母此神ノ給ル也ト思テ自ラ出テ牛ヲ家ニ引入ントスルニ牛ノ力強シテ不引得神母自衣ノ帶ヲ解テ牛ノ鼻ニ繫グ程ニ牛引テ逃ヌ神母追テ行ニ牛入ヌ神母此牛及帶ヲ惜カ故ニ自ラ塞テ寺ニ入テ面ヲ背テ立リ其時寺ノ衆僧驚出テ神母カ邪見ナルヲ哀ム故ニ各南無大般若波羅蜜多經ト称ス神母此ヲ聞テ捨テ走出テ逃ヌ水辺ニ臨テ耳ヲ洗フテ云我今日不淨ノ事ヲ聞ツ所謂南無般若波羅蜜多經也ト嘆<sub>イカキ</sub>テ三度此事ヲ称シテ家ニ還リヌ其後神母身ニ病ヲ受テ死ス下略其後神母嫡女ノ夢ニ告テ曰嫌フトイヘトモ般若ノ名ヲ耳ニフレタル功德ニヨツテ忉利天ニ生セントス云々彼善光寺の旧記といふ物是を摸せる歟

○金葉集に大路に子を捨て侍りけるツヽミ物也おしくムみに書付侍りけるうた

「身にまさるものなかりけりみとり子はやらんかたなくかなしけれとも

今世俗の諺に子を捨る歎はあれと身を捨る歎はないといへるも是より出たる成へし但し此歎といふををさなき人はたゞ竹林をのみいふと思へりさにはあらず和名鈔云呂氏春秋曰沢無<sub>レ</sub>水曰<sub>レ</sub>歎<sub>レ</sub>也<sub>不</sub>和名云々又荊をもヤブとよめり同書越中新川郡大

荊<sub>アシ</sub>於保<sub>アシ</sub>とあり赤染集に

へしけかりし萩のやふこそ悉しけれしかはかりたに我宿はなし

是は萩のやふともよめるに知るへし

○今俗物を譽るによう／＼と云今物語云下毛野武正といひける隨身閑白殿の北のたいのうしろを誠にゆゝしけにて通りけ  
るにつほねのさうしよりあなゆゝしはとふく秋にこそおもひまるらすれといひたりければ此ことは未詳ついあざれといひてけり女心う  
げにてかくれにけり隨身所にて秦の兼弘にあひて北のたいのわらはにさん／＼にのゝしられつるといひければいかやうに  
のゝしれつるぞとはれてはとふく秋とこそおもへといひしといふに兼弘聞てくちをしき事のたまひけるかな府生とのを  
おもひかけていひけるにこそへみ山出ではとふく秋の夕暮はしはしと人をいはぬはかりそといふ歌の心なるへしはし  
とまり給へといひけるにこそ無下にいろなくいかにのり給ひけるぞといひければいて／＼さては色なほしてまゐり来んと  
てありつるつほねのしも口に行て物うけたまはらんたけまさはとふく秋ぞよう／＼といひたりけるいとをかしかりけりと  
云々此よう／＼といへる今いふとおなしき歎

○俗に昨夜の事をゆふべといひて夕の字をひとつになせるは非なるへしようべともよんべともいふへし昨夜万葉ヨンベ晚上同又  
仁夜神共にキスとよみたればきのふとはキスノ日といふスを中略してヒフをかよはしたるなりと云々まことに万葉集第七  
徳キス共にキスと通して伎曾母許余比毛キソモコヨヒキた伎曾許曾波兒キソコソハヨロタチカ等左宿之香などよめりされば昨日をキスといふ故に明日をアス  
とはいふ成へし明後日をアサツテとは明日去又の日也源氏浮舟巻にあつてばかりといへりけふとは此日といふコノのノ  
文字を略してコとケ通していふなるへしヒフは前のごとし

○旧本今昔物語卷廿五云、今ハ昔、腹中ニ寸白持タル女有ケリ人ノ妻ニナリテ懷妊シテ男子ヲ生ケリ其子ヲハ名ヲ關トソ云  
ケル漸長ニ成冠ナドシテ後、官ヲ得テ、遂ニ信濃守ニ成ニケリ始其國ニ下リケルニ坂向ノ饗ナシヲ為タリケレバ守其饗ニ着テ  
居タリケルニ守ノ郎等モ多着タリ國ノ者共モ多集タリケルニ、守饗ニ付テ見下スニ守ノ前ノ机ヨリ始テ畢ヲハノ机マデ、胡桃フル一

種ヲ以數ニ調レナシテ悉ク盛タリ守此ヲ見ルニ、為方ナク佗シク思テ只我身ヲ絞ヤウニス、然ハ思佗テ守ノ云、何ナレハ此饗ニ、此胡桃ヲハ多盛タルゾト問ヘバ、國人ノ申サク此國ニハ胡桃ノ木多候也ト答レハ守弥為方無佗シク思テ只身ヲ絞ヤ  
ウニス此間滅○○○迷術無氣ニ思ヘル氣色ヲ、其國ノ介ニ有ケル者、年老テ、万ノ事知リ物オボエケル有ケリ、此守ノ氣色ヲ見テ、佐ト思テ思廻ニ、若此守ハ寸白ノ人ニ成テ産タルカ此國ノ守ト成テ來タルニコソ有メ此氣色ヲ見ルニ極心不レ得、是試ト思テ胡桃ヲ旧酒ニ濃摺入テ、熱ク涌シテ國人ニ持セテ、此介ハ、盃ヲ折敷ニ居テ目ノ上ニ捧テ、畏タルヤウニテ、守ノ御許ニ持參レリ然レハ守盃ヲ取タルニ、介提ヒサグ持上テ盃ニ酒ヲ入ルニ酒ニ胡桃ヲ濃摺入タレバ酒ノ色白クシテ濁タリ守是ヲ見テ糸心惡氣ニ思テ、此酒ノ例ニモ似ズ濁タルハ、何ナル事ゾト問ヘハ、介答云、此國ニハ、事ノ本トシテ守ノ下リ給坂向ニハ、三年過タル旧酒ニ胡桃ヲ濃摺入テ在廳ノ官人瓶子ヲ取テ守ニ奉レハ守其酒ヲ食事定レル例ナリト事々シク云時、守是ヲ聞テ氣色彌只替リニ替フルフテ事無レ限然レトモ介ガ定リデ是ヲ食フ事ナリト責レバ守篩フルヒ々盃引寄スルマ、ニ実ハ寸白男更不ニタク可ラズ堪ト云テ散ト水ニ成テ流失ニケリ云々下略 あやしき物語なれとも古書にかくしるし置れし事ゆゑあるへし是を見れば胡桃は能く寸白虫を治すへし用ひ試て虚實をしらまほし又今俗伊勢へ參詣せし人の下向を迎ひに出て坂向とて饗する事有是は京都の人は逢坂までむかひに出饗する故坂向といふそれをならひて何方にも坂向といふ事となれりといへど前文を見ればいにしへ國守などの入府を國境にてむかへ饗するを坂向とはいふと見えたればもとよりいつくにてもさかむかひといへき事也境迎の異語成へし逢坂の説は後人附会の説と知られたり

○今俗小鰯にアミ雜魚アミ醬サカナと呼ぶ物り此アミといふは此小鰯の名なり和名鈔海棗魚阿美とあり是成へし山家集に云備前的小嶋と申嶋にわたりけるにあみと申物をとる所はおのくわれくしめて長きさほにふくろを付てたてわたすなり其さほのたてはしめを一のさほとそ名付たる中に年たかき海士人たてそむるなりたつるとて申なることばき侍しこそなみたこほれて申はかりなく覚えてよめる

和名鈔に所謂海糠魚是なるへし今海糠鹽備前を名産とする事も此山家集のこと書にして新猿樂記にも備前海糠といへり又鳥にアミといふ物有袖中抄に

ハみなくゝるあみの羽かひのかひもなく人を雲井のよそに見るかな

是は鳥なりあにともおはあにともいふといへり此鳥可考

○紐ビモをひぼといふも片言にはあらす濱松中納言物語に云みすのほとにむらさきのかうのすそこの御几帳うちあけてかうくみのひほながやかにうるはしきといへり

○今色めくなまめくなどいふ言葉は雅俗ともにいふことはなり此メクと云は向也メとム通あためくなどいふはアは発語にてアダとは他也メクは向也他にむかふ也万葉集に異手枕アシタツクなど書る同意

○俗大なる木などをちひさく切こしらゆるをコナスといふは木作なるへし此こなすといふも古語也うつほ物語後蔭卷にいみしき女おきな子ともむまこなど居てかうへをつとへて木をきりこなすと云々

○しこあちといふ詞墻鑿抄云日本紀忌部連色弗シコブチと云人アリ是ヲ見レハ色弗ト書ヘキニヤ件ノ人形躰ゲスシクシテシコブチナリケルヤラン云々此説いかへ今案にうつほ物語祭使卷にしこふちにあるめきたる箱二つと云々俗にぢやうふなる箱といふに同じ醜物と書へし日本紀醜女万葉ニ醜乃益雄鬼乃醜草アシコノアシコノアシコノアシと書り今俗健肥者をしこふつなる人といふもこれなるへし

○俗に少の事を露ちりはといふもうつほ物語吹上巻にいとけうある人に見たまへつきて露ちりも参り侍らさりつるといへり又露はともといふも海士シマツ丸藻物語に

へたのめ置しめしか原の露はともあはれをかけて君たにもとへ